

## 解 説

## 最近の野菜の生産動向

## な す

43年産の全国収穫量は715,400トンで、10年前の34年当時より1.8倍になっている。しかし、きゅうりやとまとの伸びにくらべると伸び率は低く、需要の漸減傾向がそのまま生産の停滞になっている。

43年産収穫量を県別占有率で見ると、1位は埼玉で8.1%、群馬が5.1%、新潟と茨城が4.7%、千葉4.6%と続いている。

埼玉は37年以降、年によって多少の増減はあるが、かなり高い水準の生産を保ち、茨城や新潟を大きく引き離している。また群馬が40年代に入ってから、着実に生産を拡大しているのが注目される。

季節別の生産では、夏秋ものの比重が圧倒的に高く、春ものは割合に少ない。

埼玉をはじめとする関東周辺の生産は、おおむね夏秋もので、春ものはハウス栽培による高知もの、大阪、愛知ものがそのほとんどを占めている。

埼玉は埼玉産地＝岩槻市、春日部市、越谷市、松伏町、吉川町、庄和町および北埼玉産地＝行田市、加須市、羽生市、騎西町、川里村を主産地として、夏から秋にかけての生産が多く、東京市場にも近いという地の利もあって安定した生産を確保している。

群馬は館林市、太田市を中心とした主産地があり、夏秋ものの生産をしだいに拡大する傾向にある。

茨城は常総産地を中心とする夏秋ものの生産が多いが38年頃から生産量は減ってきている。

新潟は産地が散在している。

愛知は名古屋を中心とした尾張産地、西尾市や豊橋市を中心とする三河産地が春もの、夏秋ものを生産しているが、これらも段々生産は下降線をたどっている。

## きゃべつ

43年産の全国収穫量は1,501,000トンで、前年の13.6%増となった。また10年前の34年頃にくらべると約2.4倍になっている。しかし最近きゃべつに替ってレタスの需要が伸びている関係で、きゃべつの需要は、やや伸びなやみ、生産過剰をきたす年がみられるようになってきた。

また43年産収穫量の県別占有率は、1位が愛知で12.4

%次いで群馬の7.6%、神奈川6.4%、千葉6.1%、長野5.0%となっている。

愛知の生産量は30年代の後からめっきり伸びている。すなわち37年以降43年までの増加率は年率21.2%という驚異的なものである。群馬、神奈川などは漸増しているがきわめて緩慢、長野は停滞ぎみである。注目されるのは千葉で、総収穫量こそ少ないが、最近の生産の伸びは著しい。

愛知は、東三河産地を中心とした冬ものが圧倒的に多く、次に、この冬ものに先がけて、この産地周辺から生産される秋もの、さらに名古屋、一宮市、稲沢市の尾張産地を主とした春ものもかなり収穫がある。

群馬は、いわゆる高冷地ものと云われる夏ものの生産が主で、嬭恋(つまこい)村を中心として長野原町、昭和村、草津町等が高原産地を形成し、全国的な名声を博している。

神奈川は横須賀市、三浦市の三浦産地を主とした冬もの、春もの、湘南産地＝藤沢市、茅ヶ崎市、平塚市、伊勢原町を主とした秋ものが多い。

千葉は銚子市、海上町、飯岡町、旭市の灯台産地を主とする春もの(灯台きゃべつ)が多く、次いで京葉産地の秋ものが多い。

長野は群馬同様夏ものが多い、主産地も群馬に隣接した山間部に形成されている。

## 結球はくさい

43年産の全国収穫量は1,867,000トンで、34年頃にくらべ2.7倍近い増加である。

また県別占有率は茨城が14.5%ときわだって高く、以下愛知の5.8%、群馬の4.8%となっている。

茨城は各年次とも他の生産県を大きく引き離し、おおむね10%を越す占有率を確保しており、増加率も、不作であった39年を除きかなり高い。

千葉、長野、愛知は、39年以降、拮抗したかたちで収穫量をのばしているが、愛知、長野は全国的な収穫量の伸びに対抗できず、占有率が下がっている。

群馬は40年代になってやや生産が伸びなやんでいる。

茨城は県下一円にわたる茨城産地＝谷田部町、豊里町、大穂町、筑波町、八千代村、千代川村、石下町、水海道市、結城市、下妻市、開城町、下館市、明野町、真壁町、協和町、大和村、古河市、総和町、三和村、境町、猿島町、岩井町から生産される秋冬ものがほとんどである。

千葉は、印旛産地(八街町、富里町、佐倉市、芝山町、山武町)および東葛産地を主とした秋冬ものの生産が多い。

長野は県下全域にわたる信州産地(川上村、南牧村、小海村、小諸市、御代田町、軽井沢町、東部町、真田町

長門所, 和田村, 辰野町, 箕輪町, 伊奈市, 南箕輪村, 富士見町, 原村, 茅野市, 開田村, 木祖村, 三岳村, 松本市, 塩尻市, 本城村, 麻績村, 坂井村, 坂北村, 四賀村, 本郷村)の夏ものが多く, 全国的にみても屈指の占有率を占めている。

愛知は東三河産地と尾張産地を主とする秋冬ものの生産が多い。

群馬は東部産地(館林市, 板倉町, 昭和村, 邑楽町)を主とする秋冬もの, 嬭恋村をはじめとする高原産地の夏ものが多い。

### ね ぎ

43年産の全国収穫量は638,500トンで, 34年頃にくらべ1.8倍になっているが, 近年やや伸びなやんでいる。

県別占有率は千葉13.9%, 埼玉12.2%, この両県が他の生産県を大きく引き離している。これに次いで茨城6.0%, 愛知5.8%, 群馬4.5%となっている。

千葉は東葛産地を中心とする夏もの, 秋冬ものの生産が多い。

埼玉は, 深谷ねぎといわれる深谷産地(本庄市, 上里村, 深谷市, 妻沼町, 豊里村)を中心とする秋冬もの, 次いで埼玉産地(越谷市, 八汐町, 松伏村, 吉川町, 三郷町)を主とする夏もの生産が多い。

茨城は北部産地(水戸市, 常澄村, 北茨城市, 勝田市, 那珂町, 日立市)と常総筑波産地(竜ヶ崎市, 藤代町, 利根町, 取手町, 守谷町, 下館市, 真壁町, 結城市, 下妻市, 石下町, 水海道市)を主とする秋冬ねぎの生産が多い。

愛知は尾張産地を中心とする夏もの, 秋冬ものが多い。

群馬は尾島産地(伊勢崎市, 尾島町, 大田市, 新田町, 境町)を主とする秋冬ものの生産が多い。

### たまねぎ

43年産全国収穫量は1,029,000トンで, 34年頃にくらべると1.7倍強の増加である。当時は大阪の泉州のものと, 兵庫の淡路島産のものとの比重が高かったが, 現在では泉州ものを主とする大阪の収穫量が減少し, 兵庫だけが高い占有率を確保しており, 他の生産県はおおむね標準化した低い占有率を示している。しかし, その中において札幌がかなり高い伸び率を示しているのが注目される。

兵庫は淡路産地(洲本市, 津名町, 東浦町, 北淡町, 一宮町, 五色町, 緑町, 西淡町, 三原町, 南淡町)の生産が大部分で, 県下の総収穫量の90%以上を生産している。兵庫は38年にかなり減少したが, 他はおおむね安定した生産を続けている。

大阪は泉州産地(和泉市, 岸和田市, 貝塚市, 熊取町

泉佐野市, 田尻町, 泉南町, 東鳥取町, 南海町, 岬町)が主な産地で, 収穫量は30年代後半まで減少傾向を示していたが, 近年は幾分安定した生産量を保っている。

札幌は札幌産地(札幌市, 岩見沢市, 富良野市)を中心とした秋ものが多く, 内地ものの春ものに, 充分対抗できる生産をあげ, 近年の収穫量の伸び率はかなり高い。

和歌山是那賀産地(那賀町, 貴志川町)と和歌山産地(和歌山市, 打田町, 岩手町, 粉河町)が主な産地で, 近年, 安定的な生産を続けている。

岐阜は西濃産地(岐阜市, 北方町, 本巣町, 真正町, 糸貫町, 揖斐川町, 大野町, 池田町)が主産地で順調な生産量をあげている。

### だいこん

43年の全国収穫量は, 3,095,000トンで, 34年頃の1.3倍となっているが, 過去の最高は38年の3,446,000トンで, その後, 小きざみな増減をたどっているが, 他の野菜にくらべかなり低い伸び率である。

だいこんは生食用としてより, 漬物用としての需要が多く, 最近の食生活の変化にかならずしも対応できず, 全般的に需要の低下をきたしており, これが, また生産の停滞をもたらしている。

43年産収穫量の県別占有率は, 標準化して差がなく, いずれも低い, わずかに愛知, 千葉が高く, 愛知は6.0%, 千葉は5.7%, 新潟, 福島, 鹿児島は3~4%とかなり低い。このことは, だいこんが全国的に広域にわたり生産されていることを物語っている。

愛知は豊橋市, 渥美半島周辺を中心とする東三河産地の秋ものの生産が大部分であるが, 冬ものもかなりある。

千葉は京葉産地を中心として県下全域から生産される秋ものが主であるが, 東葛産地, 灯台産地の春もの, あるいは冬ものも, かなりの比重を占めている。

新潟, 福島は県下全域にわたる秋ものが, ほとんどを占めている。

### にんじん

43年産の全国収穫量は503,700トンで, 34年頃のちょうど2倍にあたる。39年に若干減少したほか, ほぼ安定的に増加しており, 特に43年の増加は顕著で, 前年より14%も伸びている。

43年産収穫量の県別占有率は, 埼玉が9.9%, 愛知8.6%, 千葉7.9%, 茨城5.7%, 北見5.5%となっている。

なお, 34, 35年以前は, 札幌が全国の首位にあったがその後漸減し, 43年には逆に6位になった。これに替って北見の収穫量は漸増傾向を示している。

埼玉は36年から37年にかけて約2倍の収穫量をあげ, その後他の生産県をかなり引き離した高水準を保ち, 特

に入間産地（朝霞市，足立町，新座町，大和町，川越市，所沢市，狭山市，入間市，福岡町，大井町，富士見町，三芳村）を主とした年末から早春にかけての冬ものの生産は全国でも1，2位を競っている。

愛知も尾張産地を主な産地とする冬ものの生産が多い。

千葉は近年かなり高いのびを示し，とくに千葉市周辺から生産される春夏ものは，全国第1位の生産量を誇っている。

茨城は水戸産地（水戸市，茨城町，内原町，勝田市，那珂町）を主な産地とする冬ものが多い。

北見は斜網産地（小清水町，斜里町，網走町）を主とする秋もの，札幌は富良野産地（富良野市，南富良野町，中富良野町，上富良野町）を主とする秋ものの生産が多く，秋ものだけでは北見をかなり凌駕する生産がある。

野菜栽培と生産農家の考え方

野菜の生産は，強い需要に支えられて増加しているがただ年による豊凶の差が大きく，常に価格変動に伴う経営の不安が問題だ。

そこで，野菜農家あるいは野菜を栽培していない農家について，今後の経営に関する意向を打診すると，

- ・野菜を販売している農家で，今後さらに野菜部門を

拡大すると答えたものは 16% であった。

拡大する理由については

「農業所得の向上」 51%

「価格が高いから」 15%

の順となっている。

一方，縮小すると答えた農家は 8%

縮小の理由については

「労力不足」 51%

となっている。

また野菜を販売していない，また栽培していない農家で，

「経営として野菜部門を新たにとり入れる」と答えたものは2%に過ぎなかった。（但し，これはこの調査を行った時点(43年)での結果であることに留意されたい）

どんな野菜を作付けするか

また野菜販売農家で，今後野菜部門を拡大すると答えた農家は20%にも満たなかったが，拡大したい野菜では一露地栽培の果菜類が最も高く35%，次いで葉茎菜類の31%となっている。

施設野菜を拡大したいと答えた農家は，資金や設備の関係から，28%と露地野菜の場合より低くなっている。

野菜の拡大・縮小意向の理由別割合 (%)

Table with 16 columns: 拡大/縮小, 販/施, 農家数, 経営 (労力, 耕増, 他強化, 兼業, その他), 経済 (価高, 不安定, 販路不安定, 農業所得, その他), 技術 (栽培技術, 収量不安定, その他), その他

- 1 非販売農家には野菜作付なし農家を含む
2 理由別割合は，それぞれの拡大・縮小農家に対する割合

拡大・縮小農家の野菜類別作付意向

Table with 5 columns: 拡大/縮小, 販/施, 農家数, 種類別 (施設, 露地), 果類, 葉茎菜類, 根類

- 1 非販売農家には野菜作付なし農家を含む
2 種類別には重複計上がある

一方，縮小したいと答えた農家は10%にも満たないが縮小したい野菜では，葉茎菜類が47%と最も多くなっている。

施設栽培農家の拡大したい野菜は，やはり施設野菜が極端に高く91%になっている。

また縮小したいものでも施設野菜で60%になっているが，これは労力不足の影響が反映しているらしい。

野菜を販売していないか，栽培していない農家については，拡大したい野菜として露地栽培の果菜類（43%）と葉茎菜類（36%）があり，高度の技術と，労力を要する施設栽培野菜は僅か12%に過ぎない。